



【巻頭言】

多様な子供たちを包摂する教育課程

～一人一人の可能性が開花し、個性が輝く教育の実現に向けて～

福島県小学校長会安達支会長 児山 秀典

(二本松市立二本松北小学校)

2030年の社会と子どもたちの未来を見据え、新しい学習指導要領が目指す姿や、学習評価のあり方、各学校段階・各教科等における改訂の具体的な方向性などを示した「文部科学省教育課程企画特別部会『論点整理』」が、今年の2月17日、安達支会全員に届けられました。改訂の方向性であり、決定に至ってはいないものの、私は目を奪われたページがありました。それは「裁量的な時間」、そして「3. 多様な子供たちを包摂するための柔軟な教育課程の在り方とは？」でした。

「義務教育においてもここまで切り込むのか」が正直な感想です。「児童生徒の実効ある成果を目指すねらいの下での標準時数を減じる・上乘せする対応について」「学習支援や効果的な教育プログラム実施のための裁量的な時間の位置づけ」そして「特に必要な教科の開設」についての説明を一読し、真っ先に頭に浮かんだことは「実態に基づく課題解決や創造的な活動の創出など、新たな枠組みの生かし方をふまえたより独創的な特色ある学校、教育課程が生まれていく、いや創っていくようになる」ということでした。一人一人の子どもたちの個別最適な学びに向けた土壌づくりや仕組みは、紛れもなく子どもや保護者にとって希望の光となりますが、一方でそれを叶えるための様々な取組や工夫等に思いを広げ、そのリーダーシップを執る自分の力量、責任の重さに思いを寄せる時、正直、そう簡単なことではないと不安な感情も生まれたりもしました。昨年教育課程企画特別部会の中で、カリキュラム・マネジメントについて、「一定期間、柔軟な教育課程編成に伴走支援する施策も必要ではないか」が、論点・留意点として挙げられたことは、実施の可否を問わず、ひとまず心を落ち着かせる救いのひと綴りでもありました。

平成10年改訂の学習指導要領において初めて記された「特色ある教育」については、それ以前においても、そして現在に至るそれ以降も全国各地で進められていて、昭和43年以降、全連小刊行図書として便覧も作成されていることは、校長先生方もご存じのはずです。中には、実際に見てみようと思われ出かけた校長先生方もいらっしゃると思います。そうです、「論点整理」に示された取組のエッセンスは、今に始まったことばかりではないのです。体制としての枠組み、また言葉として明示されることで、学校や地域等の課題解決に向けた戦略的アプローチの追い風となり得ることは間違いなく創造的な取組の検討が積極化し、新たなプランが創出されていくことでしょう。

「論点整理」の中には、「個々の児童生徒に着目した特例の新設・拡充」も示され、通級指導と日本語指導についての取り出し指導の拡充、不登校児童生徒や特異な才能のある児童生徒の教育課程についての特例の新設が検討されています。このうち「特異な才能のある児童生徒の教育課程についての特例の新設」については、例えば公的な検定による明確な判断基準等がある場合に、それを運用する、運用させたい児童生徒が生まれるようにと思いますが、不登校児童生徒に対する個別の教育課程編成については、学力の実態把握に難しさも想定されるように思います。いずれにしても、私たちが教育現場で事あるごとに、理想として、目指す指導の視点として掲げてきた一人一人へのアプローチを、より細部にわたり、具体的に、明確に示した改訂の方向性が見えてきます。

定数配置、産育休等の補充、本県に至っては少人数指導に係る加配等、人材の確保について時に課題を抱える場面に遭遇することもある現在ですが、新たな教育の方向性にもアンテナ高く情報をつかみ、目の前の子どもたちの実態をしっかりと把握した上で、新たな教育課程編成との接点に、課題解決の糸口や一人一人の子どもたちの学力や人間性を高める希望を見出し、創造的な教育課程編成に向けた歩みを一層進めていくようになると思います。今後、新学習指導要領がどう体を為すか見極めつつ、これからの社会を担う可能性に満ちた子どもたちのために、これまで同様に怯まず歩んでいきたいものです。

【総務部活動計画】

「つながり 深める」校長会として

総務部長 五十嵐 洋之
(大玉村立玉井小学校)

1 活動方針・活動内容

- (1) 全国・東北・県小学校長会との緊密な連携と調整のもと、協議・研修等の充実を図る。
 - 第78回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会(10月1日～2日 札幌市)
 - 第66回東北連合小学校長会研究協議会宮城大会(7月2日～3日 仙台市)
- (2) 支会・各専門部の組織を十分に機能させ、計画的かつ継続的な活動を展開し、特色ある学校経営の創造に資する。
 - 年間計画に基づく研修や情報交換
 - ・ 全体研修会、方部別研修会
 - ・ 各専門部(研究部、行財政部、広報部、生徒指導部、経理部)の活動と情報交換
 - 創意工夫を凝らした運営
 - ・ 活動内容・方法等の工夫
- (3) 各種教育団体との連携を密にし、教育課題の解決と教職員の資質・能力の向上に資する。
 - 県小教研究協議会の開催
 - ・ 道徳科部会への協力(10月15日 大玉村農業環境改善センター)
 - 地区小中学校長協議会との連携活動
 - ・ 総会 (4月10日)
 - ・ 中堅教員等実務研修会 (5月～6月)
 - ・ 安達地区教育長との懇談会(8月28日)
 - ・ 退職校長会との懇談会 (12月4日)
 - ・ 役職定年校長感謝会 (3月 5日)
 - 小中学校音楽祭、理科作品展、特別支援学級小中交流会・児童作品展、書写実技研修会

2 「つながり 深める」校長会として

現在、学校が抱える課題は多様化・複雑化を増しています。そのような、学校経営上の課題解決に向け、25名の会員が情報等を共有することでつながり、本音で語り合い、校長としての在り方について研修を深めることができる「校長会安達支会」でありたいと考えます。

【特集テーマ】

適正かつ迅速な経理を目指して

経理部長 吉川 奏子
(二本松市立渋川小学校)

1 活動方針

全国・東北・県小学校長会の動向を踏まえ、本会の目的に沿った質の高い活動が展開できるよう、適正な予算編成や円滑な執行にあたる。

2 組織

二本松方部 菅野 芳弘(安達太良小)
東達方部 村松 泰二郎(川崎小)
南達方部 遠藤 博(白岩小)

3 会費の執行状況

(1) 今年度会費 70,000円

(2) 負担金内訳

①県小学校長会費 前・後期

各15,000円

②全連小会費 8,000円

③東北連小会費 2,500円

④小中連協会費 11,000円

⑤研究大会基金 1,000円

⑥全国・東北大会参加補助

1,000円

⑦日本教育会費 3,100円

⑧東北連小準備金 300円

(3) 賛助会費

①退職校長会賛助会費 500円

(4) その他

- ・ 残金については、全連小・東北連小大会参加費や研究調査費等に充てる。
- ・ 校長会研修会はすべて県費旅費対応となる。
- ・ 会員の皆様のご協力に感謝申し上げます。

【行財政部活動計画】

教育行政上の課題解決に向けて

行財政部長 安藤 靖
(本宮市立本宮小学校)

1 活動方針

- (1) 教育行政上の課題解決のために、組織的・継続的な対策活動を推進する。
- (2) 当面する課題や新たな視点から調査研究活動を行う。また、特別調査として今年度も大震災・原子力災害の影響に係る調査を継続して行うものとする。
- (3) 関係機関との連携を保ち、教育行政上の諸問題について情報を収集するとともに、広報部と連携を図り適時・適切な対応に努める。
- (4) 組織をあげて地域課題を解決するための活動を推進する。
- (5) 全連小、全日中、東北連小・東北地区中及び関係機関との連携を図り、広い視野に立って課題解決にあたる。

2 活動内容

- (1) 多様な教育活動に対応するための教育条件の整備充実
- (2) 教職員の待遇改善と福利厚生の上昇
- (3) 当面する重要課題の調査研究とその課題解決

3 活動計画

- (1) 行財政部会
 - 組織・活動計画作成（4月）
 - 調査Ⅰ・Ⅱ及び特別調査の実施（5月）
 - 行財政上の課題把握（6・7月）
 - 要望活動の推進（8月～）
 - 活動の反省（1月）
 - 人事の反省（3月）
- (2) 各種県行財政部会等への出席
 - 県行財政部合同部長会・代表部長会
 - 県行財政部幹事会・合同幹事会

【研究部活動計画】

第Ⅳ期 研究推進 「ふるさとに誇りをもち 多様な他者と協働しながら しなやかにたくましく未来を切り拓く子どもを育てる学校経営の推進」(令和8・9・10年度)

研究部長 齋藤 みちる
(二本松市立杉田小学校)

1 活動方針

- (1) 「研究の手引き」をふまえ「ふるさとに誇りをもち 多様な他者と協働しながら しなやかにたくましく未来を切り拓く子どもを育てる学校経営の推進」の育成に向けた校長としての取組が明らかになるように進める。
- (2) 組織的な研究であることを認識し、組織だからこそできる質の高い実践研究を進める。
- (3) 第Ⅳ期研究の第1年次として、研究の趣旨を理解し、各校の課題を見極め、東達方部を中心に研究内容を精選、方向性を決定し、安達支会としての研究課題を明確にし、各校で実践にあたる。
- (4) 7月の東北連小宮城大会、10月の全連小北海道大会に参加し、校長としての職能向上に寄与すると共に、令和9年度全連小福島大会を見据え運営の仕方などを学ぶ機会とする。
- (5) 令和9年度全連小福島大会に向けて協力体制を整備し、安達支会として協力する。

2 活動内容

- (1) 各方部・各校による実践
- (2) 7月東北連小宮城大会14名の参加と報告
- (3) 10月全連小研究協議会北海道大会への参加と報告
- (4) 2月支会大会を開催。令和8年度の各校の取組の状況報告と県幹事によるご指導

3 研究組織と令和8年度研究の視点

二本松	方部主任 齋藤みちる (杉田小)	第6分科会 健やかな体 健やかな体を育むカリ キュラム・マネジメントの 推進
東達	方部主任 國馬 光夫 (新殿小)	【視点2】 健康で安全な生活を営 む実践力を育てる教育活 動の推進
南達	方部主任 安藤 靖 (本宮小)	

【生徒指導部活動計画】

【広報部活動計画】

生徒指導上の課題解決に向けて

生徒指導部長 村松泰二郎
(二本松市立川崎小学校)

1 活動目標と方針

- (1) 県小学校長会生徒指導部活動方針・重点を踏まえ、本支会における生徒指導上の諸問題及び対応について情報交換を行い、学校経営に役立てる。
- (2) 生徒指導上の共通課題等について解決策を探る。
- (3) 幼稚園・子ども園・保育所や中学校及び関係機関との連携を図り、児童の健全育成に努める。

2 活動内容

- (1) いじめ、虐待、SNS・ネット利用等、生徒指導上の諸問題が社会問題化する中、各学校の当面する課題についての情報収集と情報交換を行い、各校の学校経営に生かす。
- (2) 県校長会の生徒指導調査(A・B・C)を実施し、各校での効果的な活用につなげる。
- (3) 不登校、ネット依存等、本地区の共通課題の解決に向けて情報交換や話し合いを行う。
- (4) 各中学校区ごとに関係機関との連携を図り、幼・小・中の一貫した生徒指導を行う。

3 活動計画

- (1) 生徒指導部会
 - 組織・活動計画作成(4月)
 - 県生徒指導調査の実施(5～6月)
 - 生徒指導研修の実施(6月)
 - 調査報告書の提供(12月)
 - 今年度の反省と次年度の取組(2月)
- (2) 各種県生徒指導部会への出席

4 生徒指導部組織

二本松方部	荒川	修(塩 沢 小)
東 達 方 部	齋藤	直(東 和 小)
南 達 方 部	五十嵐	洋之(玉 井 小)

学校づくりを支える広報活動

広報部長 騎西 克枝
(二本松市立小浜小学校)

1 活動目標

- (1) 会員の研鑽と交流、学校経営に寄与する広報活動を推進する。
- (2) 関係機関との連携を図り、情報交換や資料提供のための広報活動を推進する。

2 活動内容

- (1) 広報「安達太良」の発行(年3回)
- (2) 地区広報部会の開催と連携
- (3) 県広報部幹事会との連携
- (4) 県会報等への寄稿

3 活動方針

- (1) 広報「安達太良」の発行に重点を置き、全会員1回を原則として寄稿を依頼する。
- (2) 校長会組織や担当する領域・分野を生かして寄稿を依頼する。
- (3) 広報の発行は年3回とし、支会の特色を生かし親しみのもてる編集に心がける。
- (4) 県会報等の寄稿については、支会長より依頼する。
- (5) 会員への会報はメールで届ける。

4 活動日程

- (1) 広報部の活動計画
(第1回研修会にて承認)
- (2) 広報部会(必要に応じてメール等)
- (3) 広報の発行予定

206号	7月1日
207号	12月1日
208号	3月1日
- (4) 県会報への寄稿
 - 県会報「【支会だより】原稿依頼・「今年度の活動に向けて」(263号)

5 広報部組織

二本松方部	石川	淳(油井小)
東達方部	根本	芳宏(石井小)
南達方部	澤藤	晃治(大山小)

【新任校長として】

【新任校長として】

「安達は一つ」の温もりに支えられて
～中学校から小学校への新たな一歩～

二本松市立原瀬小学校 清野 正志

これまでの教職生活のすべてを中学校で過ごしてきた私にとって、小学校での勤務は初めての経験であり、着任当初は正直なところ大きな不安を抱えておりました。しかし、昨年度まで同じ学区内の中学校に勤務していたこともあり、近隣の小学校の先生方には大変温かく迎え入れていただきました。些細な相談事にも丁寧に耳を傾け、優しく手を差し伸べてくださる諸先輩方の存在は、私にとって何よりの支えとなっております。改めて安達支会の「安達は一つ」という合言葉の心強さを実感する毎日です。

本校の教職員も常に明るく、熱意に満ちあふれています。優しさと厳しさを兼ね備え、子どもたちに誠実に向き合う姿に、私自身が日々元気を分けてもらっています。そして何より、全校生45名の「原瀬っ子」たちは、人数こそ少ないものの、一人一人が明るく元気で、授業や行事の場で見せる意欲的な発表には目を見張るものがあります。



入学式の翌日に、「朝の運動、今年もありますか」と子どもから声をかけられました。本校では朝の会の前の10分間、上学年と下学年が交代しながら、上級生主体で「おにごっこ」などに本気になって取り組んでいます。全力で駆け回るその姿は、中学校の部活動とはまた異なる、小学生ならではの純粋な生命力に溢れており、そのエネルギーには思わず感嘆してしまいます。

この子どもたちの輝く瞳を守り育ていくため教職員が一丸となり「チーム原瀬」として歩んで参りたいと思います。安達支会の皆様には今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

子どもたちの目のかがやき

二本松市立石井小学校

根本 芳宏

4月の初め、英語の授業が行われている教室に入ると、真っ直ぐに手を挙げる6年生の姿がありました。また、音楽室を訪れれば、目を輝かせて熱心に拍を打つ5年生の姿が目に見え、子どもたちの学ぶ意欲に胸を熱くし、思わずシャッターを切りました。

本年度、校長として石井小学校に着任いたしました。教頭時代とは異なり、日々の流動的な業務に追われることは少なくなったものの、逆に「次に自分は何をなすべきか」と、戸惑いを覚えることもありました。しかし、一歩教室へ足を踏み出せば、私たちが守るべき子供たちの笑顔があります。校長が果たすべき真の役割とは、この子供たちの目の輝きを絶対に失わせない教育環境を構築することにあると、強く確信いたしました。

「子供は教師の相似形」と言われます。子供たちに「生きる力」を育成するためには、まず指導する側の教職員自身が、高い自己マネジメント力を発揮しなければなりません。自らの実践を省察し、主体的に日々の授業改善に取り組む教職員の姿こそが、子供たちの模範となり、その瞳をさらに輝かせる原動力となるはずです。

この理想を具現化するため、本校の学校経営ビジョンに則った明確な戦略を構築し、全教職員と徹底して共通理解を図ってまいります。同じベクトルのもとで確かな教育活動を展開していくことこそが、校長としての使命です。そのために、私自身もたゆまぬ自己研鑽に励む所存です。どうぞよろしくお願いいたします。



【特集テーマ】

【特集テーマ】

ふるさと学習の目指すもの

二本松市立新殿小学校 國馬 光夫

令和10年度、岩代地域の小中学校5校が統合され義務教育学校が開校されます。現在、教育課程の検討が進められ、9年間の学びの柱として「ふるさと学習」を位置付けようとしています。ふるさとの人、もの、こと（行事等）と関わり、自分にできることに主体的に取り組むことを通して「ふるさとに誇りをもち、自ら未来を切り拓く子ども」の育成を目指そうとしています。

では、「ふるさと」と「自ら未来を切り拓く子ども」はどのようにつながるのでしょうか。そのつながりを明確にしたいと考えていたとき、「道の駅さくらの郷」を立ち上げた山崎朋子さんとお話しする機会を得えました。ドイツで出会った「グリーン・ツーリズム」の話から岩代地域の魅力を再発見した話、道の駅を盛り上げるための苦労話など、ふるさと愛に満ちたお話の中で、特に気になった話がありました。お友達が「岩代には何にも無い」といったことに対し山崎さんが「『何言ってるの。あなたがいるじゃない』って言ったの」というのです。私は、自分の中の不透明な何かが少し晴れたような気がしました。地域と関わり、自分という存在が「あなたがいるじゃない」と言われほど認知されるようになったとき、人は自己存在感を強く感じるのではないのでしょうか。

「自分も一人の人間として大切にされている」という自己存在感を感じる場合は、第一は家庭です。次に学校。しかし、互いに未熟なことから、時に傷つけ合うことも多く、自己存在感を感じられない場合もあります。一方、岩代地域は「子どもは地域の宝」として接してくれる土壤があります。

他者に大切にされた経験は、子どもたちの心を支え続けるでしょう。その支えがあるからこそ、未知のことに挑戦し続け、自己肯定感や自己有用感を感じることができるようになると考えます。

子どもの心を支える基礎を作るふるさと教育。私たち教師の単元構想力とコーディネート力、そして地域と学校を繋ぐ校長のリーダーシップが問われています。



「人に学ぶ、地域に学ぶ」

本宮市立和田小学校 石井 隆博

本校でも様々な外部講師から教えていただいたり、地域とのつながりを密にする取組を行ったりしています。その取組を幾つか紹介します。

1 とろろ芋栽培などの各種農業体験

地元の名産であるとろろ芋の「植え付け」「ムカゴ取り」「収穫」と、地域の栽培農家の方からご指導いただき、地元の特産について理解を深めることにつながっています。

2 高齢者疑似体験や施設訪問、ハンドバイクや車いすバスケット体験などの「福祉学習」
高齢や障がいなどのハンディキャップをもつ人の疑似体験やお話を伺ったり、車いすに乗って実際にバスケットボールを体験したりすることを通して、多様な他者との共生共存について考え、持続可能な社会を創造する契機となっています。

3 カルタ取りを通して学ぶ郷土

本宮むかしむかしの会代表の伊藤豊子さんから、「もとみやカルタ」を使って、本宮の歴史や史跡、名所などを学びます。自分たちの住んでいる郷土のよさを改めて知ると共に、新たな気付きが生まれています。

4 岩角山岩角寺大梵天祭での太鼓演奏

和田にある古刹「岩角山岩角寺」において、毎年1月3日に大梵天祭が執り行われます。近隣に限らず遠方からも多くの参拝客で賑わう中、和文化クラブの児童が「あだたら太鼓」を披露します。少子高齢化により地域の伝統や文化の継承が危ぶまれる中で、子どもたちの参加は地域とのつながりを深めるよい機会となっています。

多様な他者（人や地域）と関わることで、唯一無二の学びとなっています。

